



## 臨床研究部 からのお便り

第4回

# おたふくかぜのお話し

おたふくかぜ(別名：ムンプス)というものをみなさまはご存じのことと思います。

“おたふくかぜ”は“おたふくかぜウイルス”というウイルスが原因で起こります。2～3週間の潜伏期のあと、片方または両方の耳下腺(耳の下のあごの付け根あたり)が腫れて痛い病気です。熱が出ることもあれば出ないこともあり、感染しても症状が全く出ない場合もあるなど、症状には個人差があります。軽症なこともあります。無菌性髄膜炎や膀胱炎、精巣炎・卵巣炎、難聴の後遺症を残すなど重い合併症も引き起こしうる感染症です。子どもに起こることが多い病気ですが、感染したことがない場合は大人にも感染します。

ウイルスによる感染症なので抗生物質は効きません。そのためワクチンで予防することがとても大切です。世界の多くの国では、おたふくかぜワクチンは定期接種で2回打っていますが、日本はまだ任意接種のまま、接種するには自己負担です。そのためワクチン接種率は低く、定期的に流行が起こっています。

おたふくかぜの予防には、おたふくかぜに対抗できるように免疫をつけておくことが重要で、その唯一の方法はワクチンですが、世界では2回ワクチンを接種しても10年ほどずるとかかってしまうという報告が多数あります。おたふくかぜに対抗する免疫には大きく分けて2種類ありますが、ワクチンを接種したあと、どの免疫が、どの程度まで獲得されるのか、その免疫はどのくらいの期間持続するのか、ということとはあまりわかりません。ワクチンを接種

し、獲得した免疫は、実際おたふくかぜに罹ってできた免疫と比べて、どのように異なるのかもわかっていません。もし、おたふくかぜワクチンを接種した後の免疫状態やその持続期間を知ることができれば、おたふくかぜを予防するために理想的なワクチンスケジュールを考えることができます。

おたふくかぜに対する免疫能の一部は血液で測定することができます。そこで、私たちは、おたふくかぜワクチンを接種するお子さんと保護者の方にご協力をお願いし、おたふくかぜワクチンを接種する前と接種した後に、お子さんの血液をいただき、おたふくかぜに対する免疫能の一部を測定しています。また、おたふくかぜに自然に感染したことがあるお子さんにもご協力をお願いし、感染してからの年数とおたふくかぜに対する免疫状態との関係も調べています。

この研究はまだ始まったばかりですが、このことが、おたふくかぜの発生とその合併症を減らすための最適なワクチンスケジュールの組み立てに役立つことを期待しています。**ご興味のある方や協力してあげてもよいという方がいらっしゃいましたら、ぜひお近くのスタッフにお声かけ下さい。** (臨床研究部 中村 晴奈)



## 医療福祉相談室より お知らせ

4月23日から5月初旬にかけて外来棟1階の医療福祉相談室のリニューアルを行います。



その間、図書コーナーが使用できません。少しの間ご迷惑おかけしますが、楽しみにお待ち下さいね。

(ソーシャルワーカー 高村)